

昭和 53 年度

万吉西浦遺跡調査概報

熊谷市教育委員会

昭和 53 年度

万吉西浦遺跡調査概報

熊谷市教育委員会

## 序 文

熊谷市万吉は、荒川に南接し、広大な面積で農業が営まれている地区です。当地でも農業近代化の傾向に沿って、圃場整備事業が施行されることになったのですが、桑畠となっている微高地上に土器片が発見され、昭和53年8月に試掘を行った結果、縄文時代、および、古墳時代の遺跡であることが確認されました。

熊谷市教育委員会では、桑の抜根整地作業によって破壊される遺跡部分について、国、県の補助事業として、発掘調査を実施することになりました。

調査は昭和53年～54年度の継続事業として行うことになり、本年は、その初年度で、昭和54年2月1日～3月10日まで実施され、地元住民の協力と、冬としては暖い気候に恵まれ順調に進行し、多数の縄文、古墳時代等の遺構、遺物を検出しました。

本書はその概略をまとめたものですが、新しい事実も発見され、参考に資するものと信じております。

最後になりましたが、常に現地において指導、協力して下さった市文化財保護審議委員、夏目米蔵先生、県文化財保護課、深谷土地改良事務所の方々、工事請負の江田組、立正大学学生の方々に対し、深く感謝の意を表します。

昭和54年3月

熊谷市教育委員会  
教育長 森田芳一

## 例　　言

1. 本書は、熊谷市大字万吉字西浦に所在する、万吉西浦遺跡の昭和53年度分発掘調査概報である。
2. 本調査は、河南圃場整備事業に伴う事前記録保存の為の発掘調査である。
3. 本調査は、昭和53・54年度の継続事業であり、本年度はその初年度である。
4. 発掘調査は、昭和54年2月1日～3月10日まで実施された。
5. 遺構名は、その遺構の所在するグリッド名を用いた。
6. 調査組織は次のとおりである。

発掘主体者	熊谷市教育委員会教育長	森田 芳一
調査員	社会教育課主事	寺社 下博
調査補助員	駒沢大学学生	佐々木浩一
	法政大学学生	江森 光芳
	〃	並木 克文
事務局	熊谷市教育委員会社会教育課長	山下 光男
	補佐	関根 貞次
	〃 係長	養田 元二
	〃 主事	蓮沼葉子
調査指導	熊谷市文化財保護審議委員	夏目 米藏

7. 本書の編集は、寺社下が行なった。
8. 発掘調査に際し、立正大学学生、三宅、福島、渡辺、西井、駒沢大学学生、伊東氏らの協力があった。

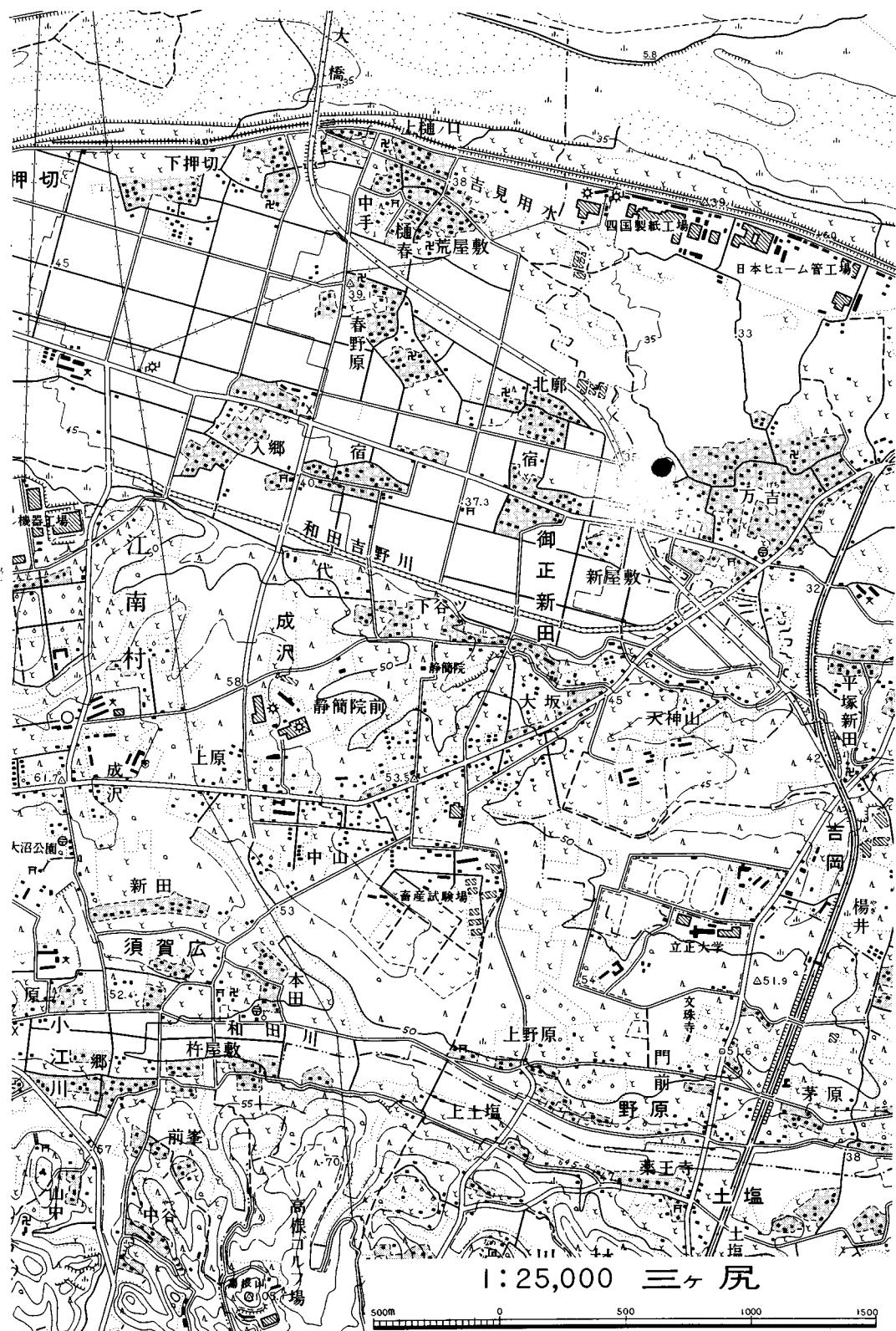


Fig.1 地形図



遺跡周辺航空写真



遺跡周辺航空写真拡大

## 遺 跡 の 概 要

PL.3



万吉西浦遺跡は、熊谷市大字万吉字西浦に所在し、荒川の南方1kmの自然堤防上に位置する。南500mには、比高10mの台地がある。遺跡と台地の中間には、また荒川の古流路がある。このため、遺跡の基本土層は、耕作土—砂質黒褐色土—砂質黃白色土（ロームが混在する場合がある）—礫層となっている。

遺跡の発掘は桑の抜根整地作業によって、破壊される部分を対象にして、40×48mの範囲で行なった。発掘方法は、発掘前の表採で土師器・須恵器、8月の試掘で縄文式土器を探集したので、両期の遺構を想定し、4mグリッドを設定し、トレンチを併用した。北東隅をA-1とし、西へB・C・D……L、南へ2・3・4……11と呼称した。発掘調査は、Aライン、Cライン、Fライン、Iライン、Kラインの南北ラインに1×3mのトレンチを入れ全体の土層状況、遺構の分布状態を知ろうとした。その結果遺構基盤土層は、砂質ローム・礫混在層（Fig. 2, 2点鎖線以西）、ローム・砂質黃白色土・混在層（Fig. 2, 1点鎖線と2点鎖線の中間）、砂質黃色土層（Fig. 2, 1点鎖線以北）の3層が認められ、遺構は、6ラインより南に集中することが知れた。次に、1ライン、4ライン、6ライン、8ライン、11ラインの東西ラインに3×1mのトレンチを入れ、範囲を限定した。その後、順次各グリッドを拡張し、遺構の精査を行なった。

遺構は、縄文時代、古墳時代、江戸～明治時代初期に及ぶ。A～1からK～11に向けて、つまり、北東部から南西部に縄文時代の遺構が、東部に近世・近代の遺構が、西北部に古墳時代の遺構がそれぞれ分布している。

縄文時代は、埋甕1、集石炉1、集石土壙墓2、小ピット1、土塙2、溝3を検出した。その他恐らく縄文時代であろうと思われる、浅い落ち込みが随所にみられる。

古墳時代は、竪穴住居址1、竪穴1を検出した。

江戸～明治時代初期に比定される遺構は、溝4、土壙1を検出した。また、縄文時代のE～6集石土壙墓を構成していた礫を取り徐いて集石した痕跡（E～7集石遺構）もこの時代に比定される。この時代の遺構は、この地域に限定されている。

時期決定については、遺構がほとんど単独で検出されていることと、上層が耕作によって破壊を受けていることにより、相互の前後関係は不明である。

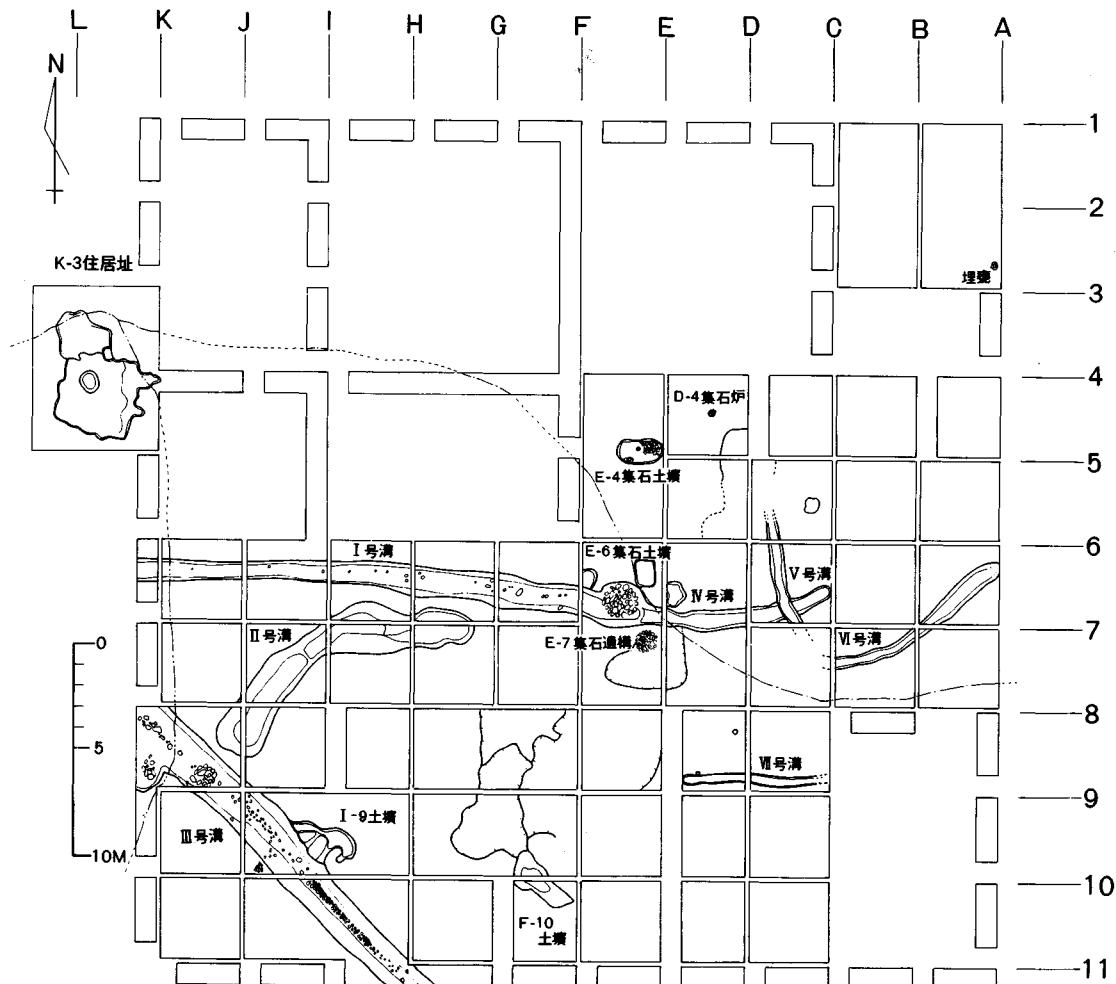


Fig.2 発掘区・検出遺構位置図



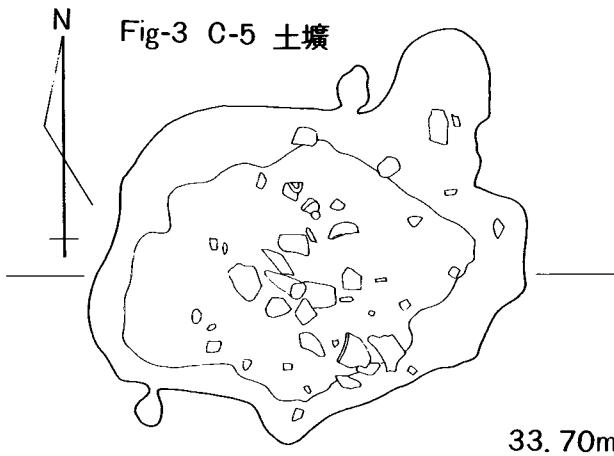
埋甕 (P L. 4・5)

A-3区より出土。土器は底部を欠き、倒立している。土器の存在が発見された層は、耕作土の最下部であった。底部の欠損は、耕作によるものであろうか。当初、出土レベルの高さと、土器を包含している土層に差異が認められない点から、包含層土の土器と考えていた。しかし、この土層が当地区の遺構基盤層であることが確認され、出土状態から埋甕とした。

P L. 4—埋甕・埋設・土層状態  
西より

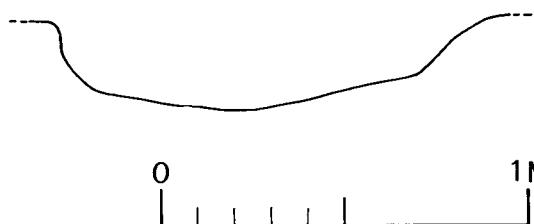
P L. 5・埋甕・埋設状態拡大





C-5 土壙 (Fig. 3, PL. 6)

長径 115cm、短径 85cm、最深部 25cm を計り、不整長円形を呈する。底面は、西側で急に落ち、東に向て緩やかに移行する。覆土には、同一器体であろうと思われる土器片が散在している。覆土には何の特色も認められなかった。



PL. 6. C-5 土壙、東より



PL.6



D-4 集石炉 (Fig. 4, PL. 7  
+ 8)

長径 53cm、短径 43cm、深さ 7 cmを計り、北東—南西方向に長軸をもつ長円形を呈する。実際の深さは、12～20cmを計ると推定される。

西側には、甕破片が45度の角度で周る。礫は上面にならべられており、周辺のものは、やや立ちぎみに、中央部のものは扁平になっている。

礫の下部に焼上が認められるが、層を成すものではない。

PL. 7 D-4 集石炉・礫除去後  
土器埋設状況、南より

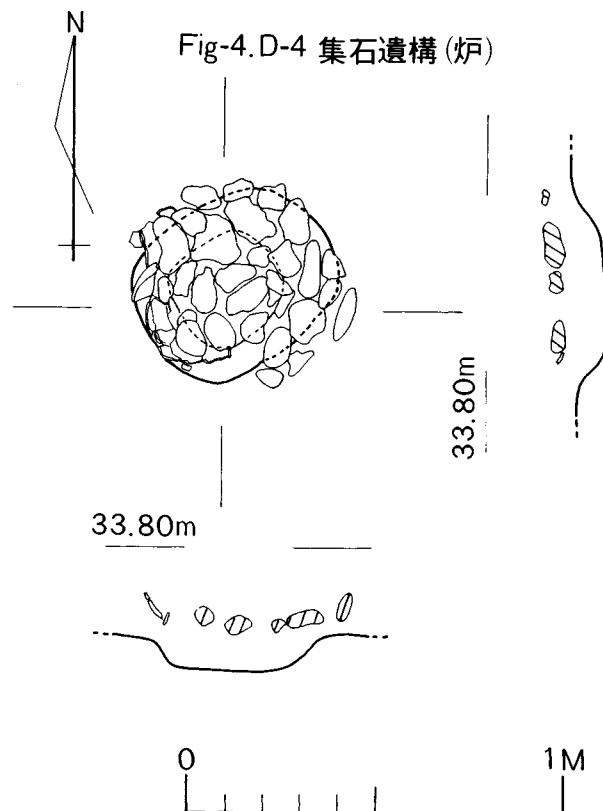


Fig. 4. D-4 集石遺構 (炉)

33.80m

1M



F-10土塙 (PL. 9)

長径3.40m、短径1.40m、深さ1.20mを計り不整長円形を呈す。主軸方位は、N-45°Wを示す。

断面は、西側で急に落ち込み、底面丸味をもつて一度急に立ち上り、中段で緩斜面に移行する。

出土遺物は、覆土中に土器片が一片のみである。

PL. 8.D-4集石炉

PL. 9.F-10土塙、  
東より



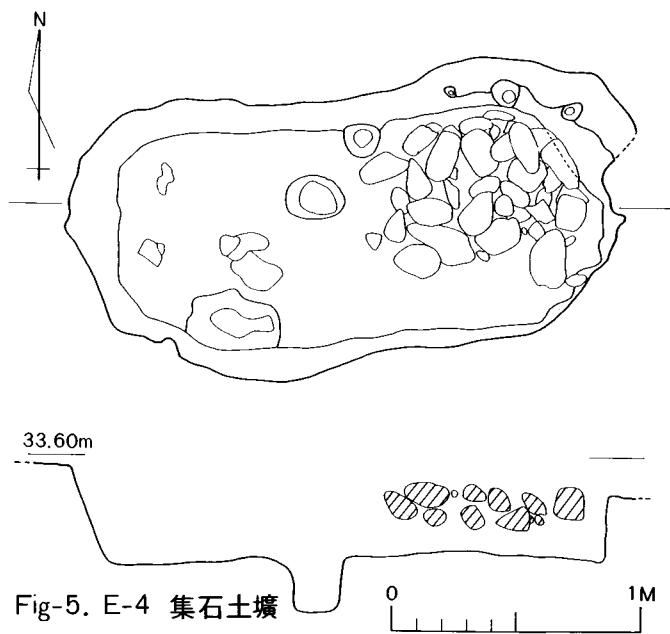


Fig-5. E-4 集石土壙

E-4 集石土壙 (Fig. 5 ·  
PL. 10)

長径 2 m 20cm、下部径 1 m  
90cm、短径 1 m 10、下部径 85  
cm、深さ 25~40cm を計る。主  
軸はほぼ N-90°-E を示し、  
隅丸長方形を呈する。

底面はほぼ水平であり、ビ  
ットが 3ヶ所にある。壁際の  
2 ピットは浅いが、中央部ピ  
ットは深さ 22cm を計る。

底面より 10cm 前後浮いた状  
態で、土壙東半分に礫が散在  
する。

覆土中より縄文式土器破片

が出土している。

PL. 10. E-4 集石土壙、南より



PL.10

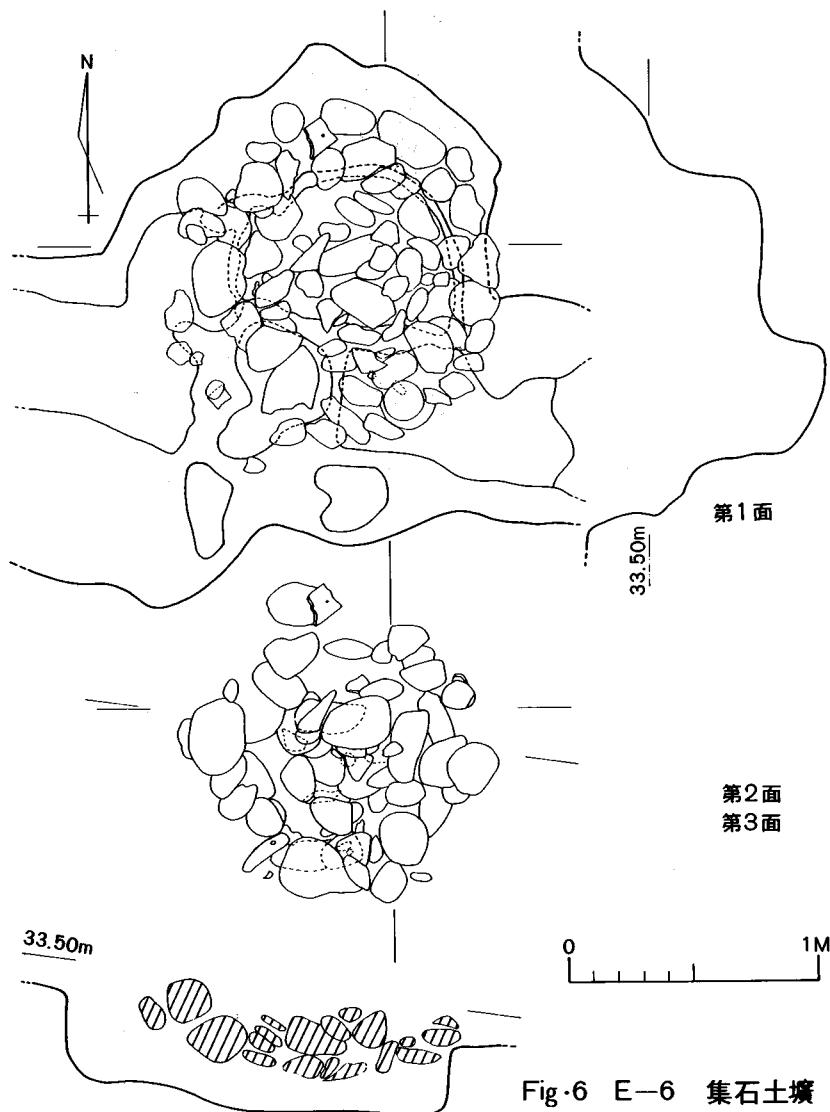


Fig. 6 E-6 集石土塗

#### E-6集石土塗 (Fig. 6, PL. 11, 12, 13, 14, 15, 16)

半径 1m 50cm の不整円形ピットの周囲および上面に、5~30cm 大の礫を円形にならべている。礫はおよそ 3 段に分かれれる。周辺部の礫は整然と配置されているが、中央部は雑然としている。

底面は段状になっている。深部は 75cm、浅部は 35cm を計る。浅部に礫第 1 面が置かれている状態で、第 2・3 面は深部上にくる。深底面と、礫の間隔は、15cm 前後あり、縄文式土器破片および骨片が出土している。

西側は 1 号溝に連続していると考えられる。東側は IV 号溝に一部破壊されている。

礫の間に瓦が出土しているが、これは、E-7 遺構との関連から、近世に流入したものと判断される。ちなみに、礫上層は、耕作土である。







PL. 11. E - 6 集石土壙、E - 7 集石遺構  
・IV号溝配置、北より

PL. 12. E - 6 集石土壙第1面、北より

PL. 13. E - 6 集石土壙第1面、東より

PL. 14. E - 6 集石土壙礫埋設状況、南より

PL. 15. E - 6 集石土壙骨片出土状況、南より

PL. 16. E - 6 集石土壙（礫徐去後）、E  
- 7 集石遺構、I号溝、IV号溝遺構配置、  
南より

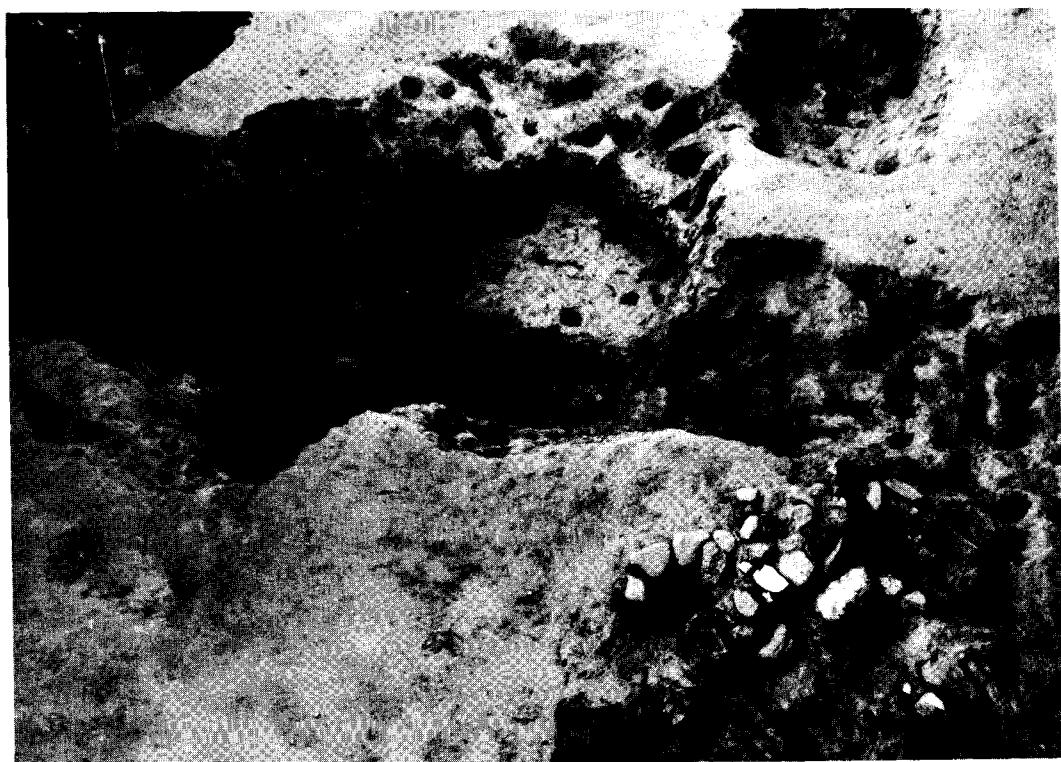
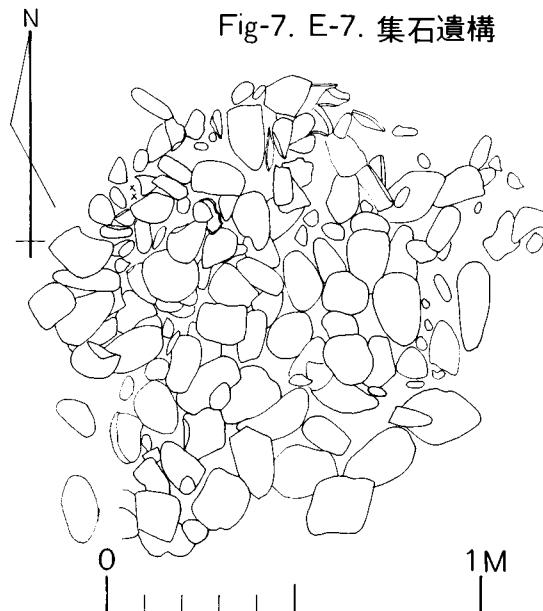


Fig-7. E-7. 集石遺構



E-7集石遺構 (Fig. 7、PL. 17)

E-6集石土塙の東南1.20mに位置し、比較的小さな礫（5～10cm大）を雜然と集積している。中には、瓦も陶磁器類も混在している。

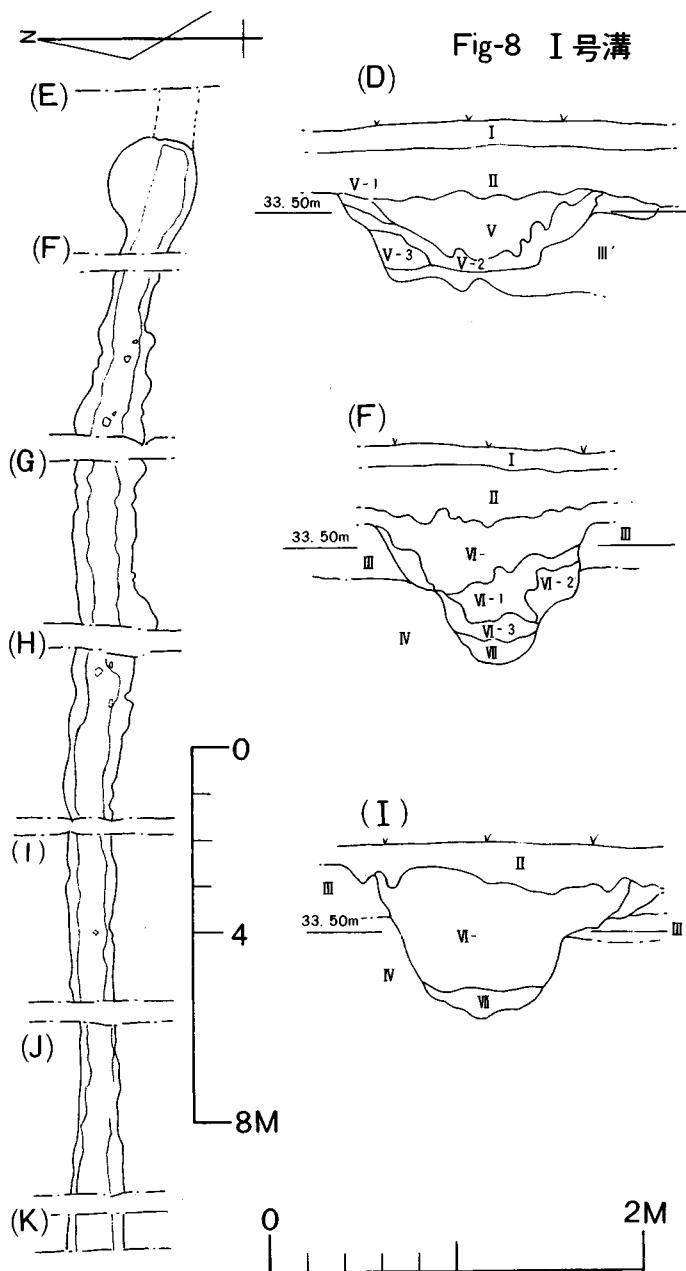
周辺には、浅い落ち込みがあり、小礫が点在する。

先に述べた様に、本遺構は、E-6集石土塙の最上面の礫を移動したものと考えられる。

PL. 17、E-7集石遺構、東より



PL. 17



- I. 耕作土
- II. 茶褐色土、しまりがあり黒色砂粒を含む
- III. 砂質黃白色土
- IV. ロームを含む砂質黃白色土  
(以上4層が基本土層となる。)
- V. 黒色土がブロック状に混入する砂質黃白色土
- V-1. 黒色土、砂粒を含む
- V-2. V層に比してブロックが小さくなり、褐色味を増す
- V-3. 黒色土ブロックが小さくなり、量が増す
- VI. 暗褐色土
- VI-1. 黄白色土粒が混入する
- VI-2. 黄白色土が、ブロック状に混入
- VI-3. VI-2と同様であるが、砂質が強い
- VII. 砂質黃白色土に暗褐色土を含む
- Dは、IV号溝セクションであり、基盤層は砂質黃白色土である。

### I号溝 (Fig. 8, PL. 18・19)

E-6集石土壤から、6ラインを、F、G、H、I、J、Kと連続している。西端を確認すべく、L-6区にトレンチを入れたが、連続しておらず、K-6区で終結するものと思われる。

溝幅は75cm~1.65m、深さ50~80cmを計る。断面台形を呈し、ところによって段をもつところもある。

遺物は、縄文式土器破片・礫が底面、覆土中に点在している。



PL. 18. I号溝、西より

PL. 19. I号溝、I. J - 6区、西より

I号溝は本来、E-6土塙下まで存在し、土塙の中央部で立ち上っていたと考えられる。それは、I号溝の底面上10cmにE-6土塙の底面が存在することによる。つまり、E-6土塙は、I号溝の東端を切って、位置しているといえる。

溝は、西側で高く、東に向けて低くなっていく様相を呈している。

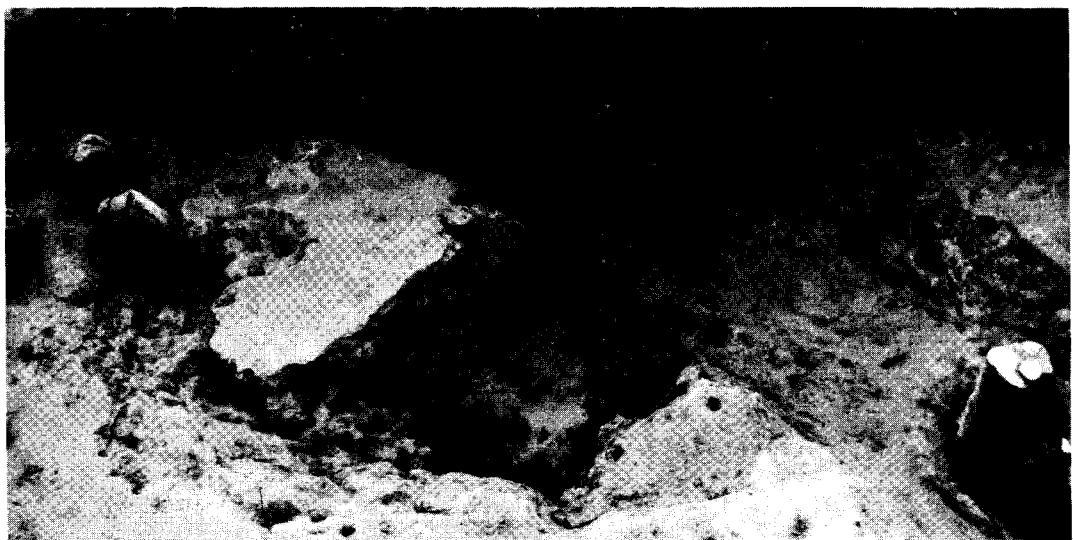
#### I-9土塙 (PL. 20)

III号溝と重複しているが前後関係は不明である。

本質的には方形を呈していると思われるが、東部に浅い落ち込みが連続して、不整形を呈している。

北西から南東に主軸をもつと考えられる。南西部が深く、段をもち、ゆるやかに立ち上る。最深部の深さは、50cmを計る。





PL. 20. I-9 土塹、北より

PL. 21. II号構、西より





2 m 10cm—1 m 70cmを計る。東南部へ移行するにしたがって両面共狭くなり、1 m 60cm—50cmを計る。

溝覆土中に集石が2ヶ所ある。共に雑然と集められたもので、他に遺構を併わず、E—6集石土塗とは性質を異にするものである。

溝底幅の広い部分では、礫が覆土中に散在するが、狭い部位に移行すると、礫の集中がみられる。このような、広い部分から狭い部分への移行は、滑らかである。

遺物は覆土中に縄文式土器片がわずかに点在するのみである。

#### II号溝 (PL. 21)

G—6・7、H—6・7、I—7・8、J—7・8区にまたがり弧状を呈する。

底面は摺鉢状を呈し、最深部で、深さ25cmを計る。

中央部より、西部と東部では若干構築法に差がある。西部は、両辺共同様に立ち上るが、東部は、北辺が急で、南辺が緩やかである。また、遺物の出土状況も異なる。西部は縄文式土器のみであるが、東部は、土師器が覆土上に散在する。

本質的には、東西2溝と考えた方が良いのであるが、覆土自体の差が認め難く、ここでは、同一遺構中の差異とした。

#### PL. 22. III号溝、北西より

#### III号溝 (PL. 22)

G—11、H—10・11、I—8・9・10・J—8・9、K—8区にまたがり、N—48°Wを示し、ほぼ直線を成す。

北西部は上部、底面共幅広く、

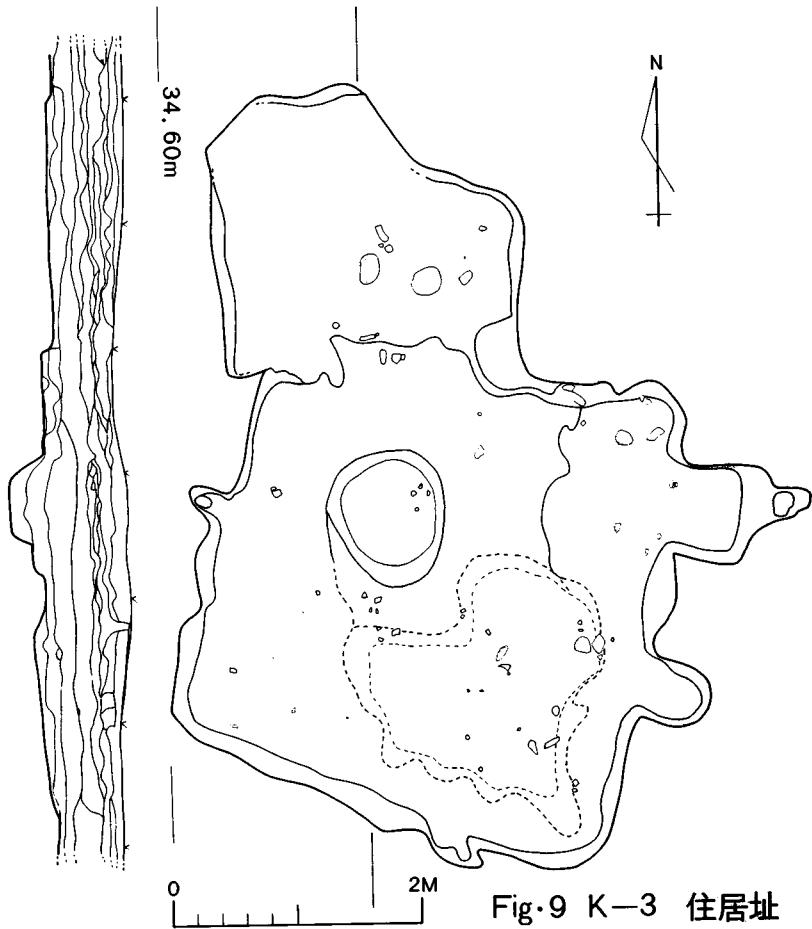


Fig. 9 K-3 住居址

#### K-3 住居址 (Fig. 9 · PL · 23 · 24 · 25 · 26 · 27)

3.65m × 3.70m の正方形を呈し、N-100°-E を示す。

床面はカマド側が高く、ベッド状を呈する。東南部はやわらかく、10cm下には礫層がある。

柱穴は確認できなかった。竪穴中央やや西北寄りに、深さ20cmの円形ピット (95cm×110cm) がある。性格は不明。

カマドは2基認められ、住居址東辺中央やや南に位置したものを廃棄し、同辺北端に移築している。前者は、幅50cm、奥行60cmほどに、壁を長方円に掘り込み、床を水平にし、奥壁を直立させている。後者は、2段構築で、煙道部は急に狭まる。

遺物は、ほぼ全面から出土し、ほとんどが小破片である。床面からのものは少なく、大多数が覆土中より出土している。また、鉄器の出土もみられる。恐らく刀子であろうと思われる。

住居址北側に床面レベル差+10cmの変形竪穴がある。住居址と同時期、もしくは、若干古い時期のものと考えられる。

一辺約2.2mを計る。床面はほぼ水平で、礫の出土が多くみられる。



PL. 23・K-3住居址、西より

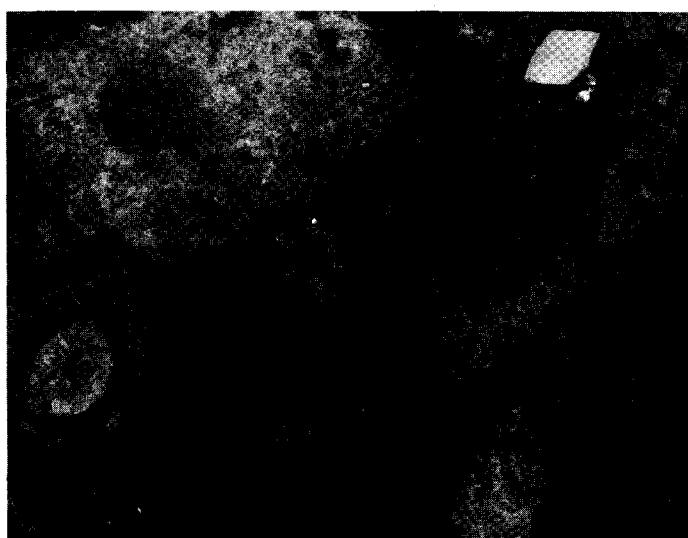
PL. 24・K-3住居址鉄器（刀・<sup>鐔</sup>）出土状況

その他の遺構、(PL. 28・  
29・30・31・32)

(A-4~7) ~ (D-4  
~ 8) にかけての範囲は、江  
戸~明治にかけての溝および  
土塙が分布する。

溝は、IV号~VII号までの4  
本ある。V号を除いては東西  
に伸びるが、VI号は、北東方  
向へ伸びる。

IV号とV号では、IV号が古  
い。V号はC-7区で浅くな  
り溝状を呈さなくなるが、VI  
号と連結すると考えられる。



PL.25.26.27



PL. 25 · K - 3 住居址、須恵杯出土状況



PL. 26 · K - 3 住居址・鉄器（刀子）出土状況

PL. 27 · K - 3 住居址、廃棄カマド





PL. 28. V号・VI号溝遺物出土状況  
南より

PL. 29. IV号・V号溝重複状況、東  
より

溝は、近世、近代の建築物に附隨する  
遺構であろう。

D-5 土塙、(PL. 32)

D-5、6区には、ゴミ捨て場的な土  
塙が在り、多数のカワラケ、瓦器、貝殻  
、礫がほとんど破片の状況で出土してい  
る。本遺構と同時期に比定されるのが、  
IV号溝である。

近世・近代の遺構は、一応、2期に區  
分され、土塙・IV号溝、V号・VI号構の  
順である。VII号溝については、不明であ  
る。

PL. 30. V号溝、磁器出土状況（下）



PL. 31. IV号・V号溝重複部遺物出土状況、南より（右）

